

『風と共に去りぬ』と戦後日本人

藤 井 淑 禎

I

小論の主人公はマーガレット・ミッチェル原作の『風と共に去りぬ』だが、ここに辿り着くまでにボクは、二〇〇八年以来、いくつかの口頭発表や論文で高度成長期の文学状況というテーマを追い続けてきており、二〇〇九年一月に刊行された『高度成長期に愛された本たち』（岩波書店）は、その中間報告とも言うべき本であった。当然、その過程では何度かの軌道修正や認識の更新などを経てきている。『高度成長期に愛された本たち』刊行後もそれは続き、その結果としての『風と共に去りぬ』への着目なので、まずは二年以上に及ぶその間の認識の更新の跡を整理しておきたい。

ボクが最初にこのテーマを公表したのは、〇八年七月四日に韓国の延世大学校ソウルキャンパスで催された講演会に講師として招かれた折りのことだ。タイトルは、「文学が庶民に愛されていた時代——一九五〇～六〇年代日本／もう一つの文学状況」となっている。高度成長期の文学の主役は全集や文庫で庶民に愛読された名作たちであって、それこそがこの時期のもう一つの、というより本来の文学状況なのだというようなことを述べている。この内容は配布された記録集にそのまま日本語と韓国語で掲載されている。同様の趣旨を、ボクはこのあと、数人を相手にした研究会（〇八年七月二六日、於立教大学）と、中国・北京で開かれたシンポジウム（〇八年九月六日、於首都師範大学）で口頭発表している（タイトルはどちらも「高度成長期の

読者と読書」)。延世大学校での講演会では配布資料は用意せず、講演草稿が記録集に掲載されただけだったが、研究会とシンポジウムでは『読書世論調査』中の「好きな著者と著書」ランキングなどの諸統計や『出版年鑑』所載の「全国ベスト・セラーズ」に基づく、詳細な配布資料を用意した。高度成長期に新作ではなく、いかに多くの名作類が広く読まれ、かつそれらがどのような消長や勢力交代を見せているかを、いくつかの年度のデータに基づいて詳細かつ具体的に明らかにしたレジユメである。

いま振り返れば、この丁寧さがかえって仇となって、ボクがこの後何年もかけて肉付けし、ふくらませていくはずのテーマが、発表内容と資料の一部を横取りされ使われてしまうという、信じがたいような被害を受けることになった。もともとボクがそのことを知るのは、その論が出た〇九年六月のことなのだけれども。

〇八年九月のシンポジウム以降、ボクは、延世大学校での講演会の記録集に載せた講演草稿とほぼ同趣旨のことを論文化し、二つの研究誌に載せている。『立教大学日本文学』第一〇一号（〇八年一二月）に載せた「名作文学と国文学——高度成長期の読書状況」と、中国で刊行されている『日本語の学習と研究（日語学習と研究）』（〇九年一月）

に載せた「文学が庶民に愛されていた時代——高度成長期の読者」（日本語）である。

両論の趣旨はもちろん「高度成長期の文学の主役は全集や文庫で庶民に愛読された名作たちである」というものだが、この大規模な読書ブームと一見功利的な高度成長期とをどのように関連付けるか、さらにはなぜ新作文学ではなく名作類がこれほどまでに支持されたのか、という二つのポイントをめぐっては、次のように述べている。

過酷な高度成長期を生き抜いていくためにこそ、心の奥底に働きかけ、潤いを与え、時に鼓舞し、人生を導いてくれるような文学が必要だったのであり、（中略）その意味で、高度成長と文学の隆盛とは決して相容れないものなどではなく、むしろその中心をなす真摯本たち（読者の心に訴えかけるタイプの本をここで仮にこう呼んでみた——藤井注）の文字通り真摯で真面目な内容が、高度成長期を生き抜く読者たちを精神的に支え、後押ししていたのである（「名作文学と国文学——高度成長期の読書状況」）。

二つ目の、高度成長期に新作文学よりも名作のほうが広

く受け入れられたことについては、このように述べている。

もし既成の文学史に登場してくる新作の諸作がそうした読者の欲求にこたえられるようなものであったとしたら、ひよっとすると彼らは古い名作などには向かわなかったかもしれない。しかし、新戯作派から第一次第二次戦後派、第三の新人、新しい文学世代へと至る作家たちの新作をちよっと思ひ浮かべてみてもわかるように、そこにはそれらの要素はなかなか見つからない。あえて言えば、いわゆる面白さなどとは無縁で、自己中心のかつ独善的であり、外来の哲学や思想で厚化粧した、難解なものばかり、というのが実態だっただろう。性的に過激なものも庶民は受け付けまい。だとしたら、それとは違ったものを文学に求める読者が、名作文学や国民文学に走ったのは当然だったかもしれない。とつつきにくい新作は敬遠するいっぽうで、感動や教訓や生きる勇気を得るためには名作文学や国民文学を、暇つぶしや娯楽のためには大衆小説を、というのが当時の平均的な読者のありようだったのではないだろうか（同前）。

さらにこのことをその後の文学の斜陽化と結びつけて、次のようにも述べている。

名作として永遠に現役でいることはできない。内容も文体も次第に古びてくるだろうし、読者の感性とのズレも次第に大きくなってくるだろう。時代が下るにつれて、一人また一人、一作また一作と、文豪とその名作たちは読者の前から姿を消していくこととなったのである。／では、果たして現代文学は、それらに代わる作品を生み出したのだろうか。読者が求めるような、「しみじみと心に訴え」たり、「人生の指針を与えてくれ」たりするような作品を、その後の文学は生み出すことができたのだろうか。残念ながら、戦後の文学はそうした方向に進むことはなかったと言っている。一九五〇年代、一九六〇年代の文学の閉鎖性、独善性、過激さ、難解さを受け継ぐような方向に、それ以降の文学も進んでいったのである。だとしたら、それに愛想を尽かした読者の文学離れは必然の結果でもあったのだった。一九七〇～八〇年代以降顕著になる文学の斜陽化の原因のもっとも大きな一つは、このようなものであったと考えられよう（同前）。

II

これが、〇八年末時点でのボクの高度成長期文学状況論であつたのだが、こうした捉え方がその後変わつてしまつたというわけではなかつた。独善的な新作文学が一般読者の期待に應えることができず、それが高度成長期新作文学の低調とその後の文学の斜陽化を招いたという見立ても、弱肉強食の高度成長期に人々がその時代を生き抜くための知恵や力や励ましを真摯本Ⅱ名作文学に求めたという見方も、依然として有効であるとは思っている。ただ、〇九年六月に出た前記の加害論文が、ボクが「真摯本の中でも選りすぐりのもの」(「名作文学と国民文学―高度成長期の読書状況」)の一つとして挙げた太宰の「人間失格」を扱っていたために、真摯本を対象とするアプローチが制約を受けるかっこうになつてしまつた。作戦なり方針の立て直しを迫られる結果になつたのである。

方針を再検討した結果として次にボクが書いたのが、「貸本屋と読書サークルの時代―吉川英治『宮本武蔵』と大衆読者」(『大衆文化』〇九年九月)であつた。のちにボクは高度成長期の読書ブームには、「キッカケ」と「目標」があつたという言い方をするようになるが(「五〇年前―

もう一つの国民読書年」『週刊読書人』一〇年四月一六日号)、もちろん貸本屋も読書サークルも読書の重要なキッカケであり、その意味で軌道修正の一環としてのボクのキッカケ研究はこのあたりから始まつている。

そして、「キッカケ」と「目標」という言葉こそちゃんとは使っていないものの、この両要素を前面に押し出し、「名作文学と国民文学―高度成長期の読書状況」での鼓舞型真摯本重視と独善型現代文学批判といった次元から進み出て、軌道修正Ⅱ認識の更新を試みたのが、『高度成長期に愛された本たち』であつた。

この本は、プロローグとエピソードのほかに、全八章(I~Ⅷ)から成るが、映画、映画教室、貸本、読書サークル、そして全集ブームといった「キッカケ」類を軸に各章が構想されている。それぞれのキッカケの実態や動向を明らかにするところから、名作を中心とした高度成長期の読書ブームの解明へと進んでいっているのである。

他方、「目標」については、「Ⅶ 全集ブームにあおられて」の章や「エピソード 敗戦からの再出版」の章、さらには「あとがき」の節などを中心に、高度経済成長と読書ブームとを、敗戦からの再出版Ⅱ欧米に追い付き追い越せ、を目的とする点で一体のものとみなして、次のように述べ

ている。

（敗戦による）三等国状態からの脱出と欧米に負けない文化国家建設とをかなえる唯一の道が、そうした教養の獲得と自己練磨だとの意識が人々を読書へと向かわせた。（中略）高度経済成長への意欲を支えていたのも、同様の意志であっただろう。経済を通しての三等国状態からの脱出と欧米に追い付き追い越せとが、目指されていたのだから。

「教養の獲得と自己練磨」の中身については、具体的に「忌まわしき軍国主義と訣別して目指されるべき民主主義。あるいは個人主義、平等主義に、反封建主義」、「軍国主義や敗戦をばねとし反省材料と」する「反戦や平和」志向、さらには「男女平等」の理念と実践、などが読書の目標として挙げられている。ただ、いま読み直してみると、確かに、真摯本重視から「キツカケ」・「目標」重視へと、軌道修正はなされたものの、特に「目標」のほうはラインアップが不十分で、未完成の感はぬぐえない。たとえば、読書の目標が民主主義や反封建主義、反戦平和、男女平等などだけだと、高度成長期の読書の主役の一人である吉川

英治の『宮本武蔵』がなぜあれほどまで読まれたのかの説明がつかないことから、そのことは歴然としている。

III

このあと、ボクは何回かの口頭発表と文章において、〈キツカケと目標〉説を再考し、それを整備・更新していった。翌一〇年三月に中国・北京で開かれたシンポジウムでの講演（タイトルは「二つの高度成長期——『風と共に去りぬ』と村上春樹文学」、三月二三日、於首都師範大学、近刊の『日本語の学習と研究（日語学習と研究）』に掲載予定）、前出の「五〇年前——もう一つの国民読書年」（二〇年四月）、同月の東愛知新聞社主催の東愛知サロン会での講演（タイトルは「高度成長期に愛された本たち」と国民読書年」、四月二〇日、要旨は『東愛知新聞』四月二二日号に掲載）などである。

『高度成長期に愛された本たち』においては「目標」のラインアップが不十分であったものが、これらにおいてようやくかたちをととのえることになったのである。そのなかのひとつである「五〇年前——もう一つの国民読書年」中に、高度成長期の読書ブームの諸目標について簡潔にまとめた部分があるので、それを引いておこう。

戦前の男性中心主義、〈家〉中心主義、さらには全体主義・軍国主義こそが不幸な暴走の原因であったとすれば、戦後の自己や社会の改造は、それとは逆の、女性や子供といった弱者の尊重、民主主義・個人主義の確立、さらには反戦平和の実現、といった方向に向かわなくてはならない。と同時に、欧米並みの豊かな生活や開かれた男女関係も実現したいし、どん底から這い上がるためには克己・忍耐も必要だろう。

これらが高度成長期の読書の目標であり、すでに述べたように、こうした目標をもったこの時期の読書ブームと高度成長とはパラレルであって、「どちらも戦勝国に追い付き追い越せが大目標であり、違うのは、高度成長のほうが経済成長によってそれを果たそうとし、読書ブームのほうが、読書を通じて戦前的な自己を改造し、新時代にふさわしい常識や教養を獲得する、すなわち文化の面からそれを果たそうとした、というルートの点だけ」（五〇年前——もう一つの国民読書年）だったのである。

そうした高度成長期の読書の目標とその時期に愛読された本とは、当然のことながらセツトとなっている。たとえば戦争への反省、反戦平和という目標の場合は、中身を讀

む以前にすでにタイトルからしてそうした内容が予想される、ヘミングウェイの『武器よさらば』、トルストイの『戦争と平和』などと結びついている。そのあまりにもあからさまなタイトルから、反戦・平和・非武装などの理念が当然作品中にこめられているにちがいないと思い、その理念を学び、身につけるために読まれたのである。

同じようにセツトの関係を想定できるものを思いつくままに挙げてみよう。女性や子供といった弱者の尊重、男女平等なども、戦後たいへん重要視された「目標」だが、モーパーサンの『女の一生』は夫の放蕩に翻弄され、頼りの息子にまで裏切られる女性の半生を反面教師的に描いて、女性の地位向上を訴えた作品とみることができる。同タイトルの山本有三の『女の一生』の場合は、さまざまな困難を乗り越えて強く生きて行こうとする女医の姿に女性読者は励まされたはずだ。パール・バックの『大地』は、中国の貧農の妻の忍従と波乱の生涯を、やはり一種の反面教師として描いて、読者に女性問題、貧困問題の再考を迫る。逆境をはねのけて最後はささやかな幸せを手にするブロンテの『ジェイン・エア』の場合は、正攻法で、幸福獲得までの苦難の道をたどって、読者の共感を呼んだ。いっぽう子供を描いたものとしては、山本有三の『路傍の石』、下村

湖人の『次郎物語』などが、困難にもめげず、強くたくましく生きていく子供の姿を描いて、読者を励まし、勇気づけた。

敗戦のどん底から這い上がるためには克己心や忍耐力も不可欠である。吉川英治の『宮本武蔵』はそうした精神を養うものとして期待されだろう。前出の『路傍の石』や『次郎物語』も同様の効果を期待されたはずだ。『宮本武蔵』と並ぶ国民文学と言つていい山岡莊八の『徳川家康』の場合は、目標としてはちよつと異色だが、織田と今川という二大強国のあいだで苦悩する小国徳川の運命が、アメリカとソ連という二大強国に支配された東西冷戦下の小国の運命と重ね合わせて受け取られ、その意味では日本の進むべき道について考えさせた作品と言える。

かつての貧富の差の大きい国民の暮らし、個人よりも全体を優先させる風潮、恋愛や結婚への干渉に象徴される自由の抑圧などへの懷疑・反省は、欧米流の豊かな生活への憧憬や、開放的な男女関係への憧れとなつて、そうした方向での読書を促した。前者の例としては、一九五二年に全集ブームのつて大ヒットした横光利一の『旅愁』をあげることができる。その冒頭は、オシヤレなフランスのセーヌ河の河畔を主人公たちが散策するところから始まつてい

る。オペラ座、ルーブル美術館、マロニエの木蔭のベンチでの語らい、パリ祭の賑わい、オシヤレなカフェにレストランと、敗戦国の粗衣粗食の国民がうつとりするようなモダンな描写が続く。この作品以外にも、当時愛読された欧米の名作小説類はたいいていこの欧米への憧れという要素を持つている。

開放的な男女関係への憧れの例としては、『青い山脈』や『陽のあたる坂道』といった石坂洋次郎の青春小説をあげるができる。開放的といつても七〇年代以降の作品と比べれば穏健なストーリーや描写に終始しているが、それでも、男女平等、親の束縛よりも個人の意志を尊重、など、当時としては進歩的な男女観・恋愛観が読者の心を惹き付けたにちがいない。

このように当時広く読まれた本を検討してみると、なぜこれらの本が好まれたのが、ひいては当時の読者の考えや欲望、悩み、希望、目標などが、手に取るようにわかる。欧米流の豊かな生活、開放的な男女関係、男女平等、反封建、個人の尊重、子供や弱者の擁護、反戦平和、克己・忍耐による逆境の克服と上昇志向、冷戦下の小国のあり方、などが、日本の高度成長期の読者たちの心を占めていたものだったのである。

IV

さて、いよいよ『風と共に去りぬ』の出番である。ここまで、真摯本重視から「キッカケ」・「目標」重視へ、「目標」の整備と名作類とのセット化へ、という二年余りにわたるボクの高度成長期文学研究の跡をたどってきたが、これまで見てきたほとんどの作品は、「キッカケ」にしても「目標」にしても、たいていは一対一の対応だった。たとえば『旅愁』であれば、キッカケとしては全集ブームとのみ対応し、目標としては、欧米流の豊かな生活への憧れとのみ対応し、というように。また石坂洋次郎作品であれば、映画（キッカケ）と開放的な男女関係への憧れ（目標）とのみ対応し、といったように。

これらに対して、『風と共に去りぬ』の場合は、実に多くの「キッカケ」や「目標」と対応しており、その度合いは高度成長期に愛読された名作類の中でも群を抜いている。当初は高度成長期文学の代表としてさまざまなベストテン類の常連である『宮本武蔵』に注目していたボクが、次第に、『風と共に去りぬ』こそは高度成長期文学の主役ではなかったかとの確信を深めていったのも、その突出ぶりゆえだったのである。

前述の通り、ボクは一〇年三月の国際シンポジウムで「二つの高度成長期―『風と共に去りぬ』と村上春樹文学」というタイトルで講演をしているから、『風と共に去りぬ』＝高度成長期文学主役説は、この頃からはつきりとした形をとることになったようだ。真摯本重視から「キッカケ」・「目標」重視へ、「目標」の整備と名作類とのセット化へ、に続く、第三の軌道修正である。

マーガレット・ミッチェル原作のこの長編小説は、アメリカ南部ジョージア州に位置するタラという大農園と州都のアトランタ市とを舞台とし、南北戦争が始まった一八六一年から戦後の混乱が一段落する七三年までの時期を中心に、南軍と北軍との戦い、北軍の南部への侵略・支配を背景として、大農園の一家の人々の運命、とりわけタラ農園の後継ぎであるスカーレット・オハラの変遷の半生をたどった小説である。

『風と共に去りぬ』を読んですぐ気がつくのは、南北戦争の悲惨・混乱が日本の第二次大戦下のそれと重ね合わせられたらうということである。ある意味では戦争小説と言ってもよいこの作品では、北軍によるアトランタへの攻撃や、街や農園の破壊なども容赦なく描かれている。とりわけ戦火を避けてスカーレットたちがアトランタからタラへと脱

出するくだりなどは、手に汗を握る迫力だ。そして主人公たちが住む南部に戦後進出してくる北部の「悪人」たちは、進駐してきた占領軍と重ね合わされたにちがいない。このように戦争批判、反戦平和という要素が、まず目につく。

次はやはり主人公スカーレットの半生に象徴されるたぐましく生きていく女性の姿が、戦後の読者の共感と呼んただろうという点である。女性も男性と対等に製材所経営といったような事業に進出できるのだという事実が、旧態依然たる読者に発想の転換を促す。逆境の克服と上昇志向も、そこからはうかがえる。戦火に追われてアトランタからタラに逃れてきたスカーレットが、変わり果てた家族や農園の姿にショックを受ける場面があるが、他方ではそこには、女性束縛の象徴である「窮屈なコルセット」からの解放の感慨にひたるスカーレットの思いが書きとめられてもいた。この地点からスカーレットは、製材所経営といった女性実業家への道を歩み始めるのである。好きな相手（初恋の相手のアシユレ）と結ばれることなく、実業家として身を立てるスカーレットを通して新しいタイプの女性像を描き、女性としての幸福とは何かを考えさせる。

南北戦争中は別として、戦前戦後の南部の人々の豊かな暮らしぶりの描写も、読者の羨望の的となったと思われる。

特に並行して大ヒットした映画では、その点はいつそう強調されており、タラ農園を始めとする豊かな農園での暮らしぶりや、大邸宅での何不自由のない生活の華やかな描写は、大画面の迫力ともあいまって、観る者をその世界に引きずり込まずにはおかない。

さらに、その豊かな暮らしを背景としてくりひろげられる、さまざまなタイプの恋愛・結婚パターンや、いくつかのタイプの夫婦像の提示も、〈家〉中心の結婚が主流であった当時の読者には新鮮なものにみえたはずである。相思相愛のアシユレとメラニーの恋愛と結婚。いっぽうスカーレットはアシユレへの思いがかなわぬと知ると、一方的に求愛されていたチャールズと果断にも結婚に踏み切るものの、チャールズは戦死し、息子だけが遺される。その後も、スカーレットは、妹の婚約者のフランクを奪ったり、黒人と白人の敵対騒動の巻き添えとなってフランクにも先立たれると、今度は、富ばかりでなく善と悪とを兼ね備えた、スカーレットに執心の怪人物レット・バトラーとの結婚に踏み切る。しかし、いつまでもアシユレへの思いをひきずるスカーレットとレットの間に本当の幸福が訪れるはずもなく、やがて二人は別々の道を歩き出すことになる。

〈家〉やその象徴としての父に縛られることなく、みず

から進むべき道を手探りし、恋愛・結婚遍歴を重ねるスカレットの女性としての生き方は、女性実業家としてのもの一つ、一つの側面と表裏一体となつて、戦前はもちろん、戦後の日本人に強烈な印象を与えたに違いない。ただし、『風と共に去りぬ』に登場するのは、そのような恋愛・結婚や、大胆な女性ばかりではなかった。アシユレを終生愛し続け、貞節を尽くすメラニーの生き方は古風なタイプのそれとして共感を呼んだだろうし、さらにその上を行くのが、良妻賢母・夫唱婦随を実践するスカレットらの母エレンである。初恋の相手との恋を断念させられたエレンは、ある種の諦念をいだいてジェラルドのもとに嫁ぎ、子をなし、大農園の主婦としての役目を全うする。そして最後は隣人への奉仕の行為から伝染病（チフス）に感染し、その生涯を閉じる。このように、恋愛・結婚像や女性像だけに限って見ても、『風と共に去りぬ』の興行きと間口の広さは疑う余地がない。それこそが、この作品が空前の支持を集めた理由でもあったのである。

スカレットは三人の夫との間にそれぞれ一人ずつ子供をもうけるが、作品の後半では、三番目の夫であるレットとの間に生まれたボニーへのしつけをめぐる育児論すら戦わされている。子供中心主義、次代を担う子供の未来へ

の期待、しつけや教育も、戦後の再建をめざす当時の読者の大きな関心事だった。『風と共に去りぬ』は、当時の読者のそんな側面とも、交流を持っていたのである。

V

大輪盛登著『巷説出版界』（一九七七）は、『風と共に去りぬ』物語」と題された章のなかで、戦前と戦後の、『風と共に去りぬ』の翻訳・出版・受容について詳説している。『風と共に去りぬ』の原著の出版は、一九三五年だが、翌年アメリカ各地を回った小泉信三がこの本の評判を聞き付け、一度は岩波書店からの刊行話もあったが頓挫し、結局、大久保康雄訳で三笠書房から三八年に出版され、『戦前だけで百七十万部を突破する売行き。紙型が磨滅するまで刷り尽したほどの、超ベストセラーになった』（同書）。

もっとも、戦前のこのヒットは、戦後のさらなる大ヒットと比べれば、しょせんはその序幕に過ぎなかった。矢口進也は『世界文学全集』（一九九七）のなかで、そのあたりのことについてこのように述べている。

「風と共に去りぬ」は戦前すでに邦訳されていたが、

圧倒的に読まれたのは戦後である。第二次大戦で家を焼かれ、あるいは夫を戦場で失い、戦後は乏しい食糧を確保するため、わが国の女たちも苛烈な時代を生きぬいてきた。まだその記憶も生々しい時期に出た本書を読んで、スカーレットの生き方に自分たちのそれを二重写しにして共感した読者も多かったろう。この本をベストセラーにのしあげたのは主としてこうした女性読者だった。

『風と共に去りぬ』の戦後版は、戦前と同じ三笠書房から、社主の竹内道之助の労苦が実って一九四九年四月から刊行を開始した。最初は全四冊で出て、翌年には全五冊、全三冊、さらには「現代世界文学英米篇」の一部として全五冊と、立て続けの刊行であった。「圧倒的に読まれた」（矢口進也）証明としては、『出版年鑑』の「全国ベスト・セラーズ」で、四九年に二位、五〇年に三位となっており、また『読書世論調査』中の「あなたの店でもっともよく売れた本は」のランキングでも、四九年に三位、五〇年に二位となっており、その後も、五一年に六位、五二年に七位と、健闘している。ただし、総部数となると、『巷説出版界』が紹介している新聞記事中に記された四五万部、同じ

く『巷説出版界』で明らかにされたミッチェルへの印税一千万円超から逆算された三八万部、くらいしかあてにできるものはない。それというのも、後述のように、このあと『風と共に去りぬ』は何度も断続的に起こった全集ブームの立役者となり、そのなかで刊行されたすべてを合算することなどほとんど不可能だからである。「圧倒的に読まれたのは戦後である」とでも言うしかないのが、『風と共に去りぬ』をめぐる出版状況なのである。



右が戦後初の全四冊版(1949)、左が全五冊版(1950)

ともあれ、『風と共に去りぬ』は、戦後の日本人が実現を目指した多くの「目標」——欧米流の豊かな生活、開放的な男女関係、男女平等、反封建、個人の尊重、子供や弱者の擁護、反戦平和、克己・忍耐による逆境の克服と上昇志向など——を満載した小説として、圧倒的な支持を集めた。

『読書世論調査』中の「よいと思った本」（＝この一年間に読んだ書籍のうち、よいと思ったものの書名を書いてください）ランキングでの好成績は、その支持の高さを雄弁に物語るものだが、『風と共に去りぬ』は、一九四九年に三位になると、以後、三位、二位、そして五二年からは三年続けて一位となり、それ以後もベスト・テン、ベスト・ツェンティの常連の地位を保ち続けた。

そして六〇年前後からは再びベスト・ファイブ、ベスト・スリーのあたりにまで浮上してくる。後述のように、『風と共に去りぬ』の場合は、全集ブームや映画のリバイバル上映との相関を無視することはできないが、それにしても、一九四九年以来、三〇年近くも上位に君臨し、七一年においてすら依然として三位の座を守っている息の長さは驚嘆に値する。もちろん、その理由は、見てきたように、『風と共に去りぬ』が戦後の日本人読者の実にさまざまな関心や目標にこたえることができた大容量の作品だったからに

ほかならない。戦中・戦後の苦勞と平和願望、女性の地位・生き方、恋愛・結婚、子育て、欧米流の生活水準への羨望、逆境の克服と上昇志向などが、『風と共に去りぬ』からうかがえる戦後の日本人の熱い思いであり、彼らを取り巻く当時の社会のありさまだったのである。

VI

ところで小論の着地点は、『風と共に去りぬ』が、高度成長期の読書ブームの産みの親であるさまざまな「キッカケ」・「目標」を包含した大容量の作品であり、それゆえに高度成長期文学の主役とみなすことができる、というもののだが、最後に、さまざまな「キッカケ」と『風と共に去りぬ』との関わりを一瞥しておこう。

『高度成長期に愛された本たち』の章構成について述べたところでも触れているが、読書の「キッカケ」としては、映画、映画教室、貸本、読書サークル、そして全集ブームなどをあげることができた。このなかで、ここでは映画、貸本、全集ブームと『風と共に去りぬ』との密な関係について確認しておこう。

アメリカで三十九年に製作された映画「風と共に去りぬ」が日本でロードショー公開されたのは五二年九月（一般公

開は五三年一〇月）だが、この年の洋画の配収トップを記録したばかりでなく、六〇年頃までは戦後の全洋画中の配収トップの座に君臨し続けるという、大変な大ヒットとなった（その二、三位下には米国版「戦争と平和」、という時代が長く続くことになる）。その後、六一年七月と六七年四月にも再公開され、六一年の場合は「十戒」、「ベン・ハー」といった新作の超大作にも劣らぬ人気を呼んだ（『キネマ旬報』六一・八上旬号）。すでに見たように、小説のほうの『風と共に去りぬ』はコンスタントに支持されたというので、五二年以降と六〇年以降には「よいと思つた本」ランキングで目立つ動きを見せているから、映画が読書のキツカケとなったことは疑う余地がない。

次は貸本だが、五二年版『読書世論調査』は、『風と共に去りぬ』の最大のひいき筋は廿歳代以下の若い女性ときまつた。ところが『借りて読む』ものが『買って読む』の倍とまでは、ベスト・セラーズの方へはお陰が少ないわけだ」と指摘している。『読書世論調査』の「よいと思つた本」ランキングには、五七年度調査までは「買った」か「借りた」かが、六三年度調査までは「購読数」（＝買った）が明示されているので（他にもちろん地域別・年齢別・学歴別の明示もあり、これらは長く踏襲された）、こうした

分析が可能なのである。もっとも、『風と共に去りぬ』はこの前後の年は売れ行きの点でも好調だったのだから、それに加えてもしも「買って読む」割合までが高ければ、売れ行きのほうもさらに伸びていただろうというわけだ。

五六年版『読書世論調査』は「あなたは自分で買って読む本と、借りて読む本とどちらが多いですか」という質問を特別に設けているが、その回答を見ても、男性よりも女性のほうが、年長よりも若いほうが、そして学歴も低いほど、借りる割合が高いことがわかる。この結果からも、若い女性に人気がある『風と共に去りぬ』が、借りて読まれることの多い本であることが裏付けられよう（ただし学歴は九年以下、一二年以下、それ以上の三種のうちで、高校卒業に相当する一二年以下の読者が多い――五二年版『読書世論調査』）。

「キツカケ」の最後は、『風と共に去りぬ』と切つても切れない関係にある全集ブームである。『風と共に去りぬ』と世界文学全集との濃密な関係については、田坂憲二『文学全集の黄金時代―河出書房の一九六〇年代』（二〇〇七）が河出書房版を中心に詳細に調査しているが、これに加えて、日外アソシエーツの『^{世界}文学全集・内容総覧』（一九八六）などの助けも借りながら、『風と共に去りぬ』収録全集の

主なものを時期を限って列挙してみると、次のようになる。

河出書房「〔決定版〕世界文学全集第一期」(五四・一)、三笠書房「現代世界文学全集」別巻(五四・七)、新潮社「新版世界文学全集」(五七・一〇)、河出書房新社「世界文学全集グリーン版第1集」別巻(六〇・三)、平凡社「世界名作全集」(六一・九)、河出書房新社「世界文学全集」(六一・一一)、河出書房新社「世界文学全集豪華版第1集」(六四・六)、河出書房新社「世界文学全集カラー版」(六六・三)、三笠書房「世界名作への招待」(六六・一〇)、河出書房新社「世界名作全集」(六六・一二)、河出書房新社「ポケット版世界の文学」(六七・五)、河出書房新社「キャンパス版世界の文学」(六八・三)、といった具合である。

このうち、インパクトの強い第一回配本に起用されたのは、「世界文学全集グリーン版第1集」別巻、「世界文学全集豪華版第1集」、「世界名作への招待」、「ポケット版世界の文学」だが、それ以外の場合でも、『風と共に去りぬ』はたいいてい配本順の初めのほうに登場して、読者獲得に寄与・貢献させられている。六四年版『読書世論調査』が、「全国書店調査」の「1年間にもっともよく売れた書籍」ランキングの講評で、「豪華版で改めて売り出した河出書

房新社の『世界文学全集』は『風と共に去りぬ』の好評で、これ(二位の『徳川家康』―藤井注)に次ぐ成績」と指摘しているのは一例だが、全集ブームがキッカケとなつてさらに読まれたことが、ここからもわかる。

Ⅶ

高度成長期のあの空前の読書ブームを現出させたのが「キッカケ」と「目標」であつたとしたら、見てきたように、いっぽうで多くのキッカケとつながり、他方でこれまた多くの目標を包含した『風と共に去りぬ』こそは、その中心的な存在であつたと言えよう。

「読書世論調査」では、毎年実施している「よいと思つた本」、「買った本」、「売れた本」、「好きな著者と著書」のアンケートのほかに、特別アンケートを何年かおきに実施している。ここではその一部を紹介して、『風と共に去りぬ』と戦後日本人論の締めくくりとしよう。五五年版『読書世論調査』には「ベスト・セラーはどのように読まれているか」という特集が載っている。戦後十年間のベスト・セラーから二八冊を選び、それらを読んだことがあるかどうか質問したのである。結果は、『風と共に去りぬ』は『宮本武蔵』と『細雪』に次いで三位となっている。

五七年版『読書世論調査』には、繰り返し読む「愛読書」のアンケート結果が載っている。一、二位は『宮本武蔵』と『坊っちゃん』で、『風と共に去りぬ』は六位という結果だ。六一年版『読書世論調査』には、「あなたが、戦後読んだ本の中で、一番よいと思ったものは何ですか」への回答が載っている。一位は『人間の条件』、二位は『風と共に去りぬ』、三位は『宮本武蔵』という順だ。同書には過去一五年間の「よいと思った本」ベスト・テン入り回数の初めての集計も載っているが、ここでは『風と共に去りぬ』は『新平家物語』と並んで一位（一〇回）となっている。

七〇年版『読書世論調査』は四年分を収録した変則的な巻だが、六六年の「読書世論調査」では、「この一年間に限らず、とくに感銘をうけた本」を尋ねている。結果は、一位は『大地』、二位は『風と共に去りぬ』、三位は『氷点』となっている。ここまで見たどの特別アンケートでもそうだったが、質問内容のわりには『細雪』、『人間の条件』、『氷点』のようなどちらかというと「短命型」の作品も混じってしまったおり、それらを除いて、つねに上位にある作品となると、『風と共に去りぬ』は数少ない実力派作品の一つであったことがわかる。

七一年版『読書世論調査』には、第一回調査以来「よいと思った本」のベスト・スリーに入った本のうちで、「いま、よいと思っている本は何か」のアンケート結果が載っている。それによれば、『風と共に去りぬ』は『人間の条件』に次いで二位となっている。ちなみに三位はモーパッサンの『女の一生』、四位は『坊っちゃん』だった。

過去一五年間の「よいと思った本」ベスト・テン入り回数を集計したのは六一年版『読書世論調査』だったが、七二年版『読書世論調査』ではふたたび、過去二五年間の「よいと思った本」ベスト・ツェンティ入り回数を集計している。そしてここでは『風と共に去りぬ』は『大地』と並んでふたたび一位（二二回）となっている。

このように、一つ一つの結果では『風と共に去りぬ』はつねにトップというわけではなかったが、いくつもの特別アンケートを通してみると、その安定感はずば抜けていたことがわかる。『風と共に去りぬ』が高度成長期文学の主役たりえたのは、高度成長期の読書ブームのさまざまな「キッカケ」とつながり、多くの「目標」を包含していたからだけではなく、コンスタントに読者からこうした高い評価を受け続けていたからなのである。

（立教大学）